

## [国 語]

## 小学校入門期において「書くこと」の力を伸ばす指導に関する一考察

- 小学1年 1学期の取組 -

伊藤 一城\*

## 1 はじめに

学習指導要領解説国語編〔第1学年及び第2学年〕の「書くこと」の目標には、「経験した事や想像した事などについて、順序が分かるように、語や文の続き方に注意して文や文章を書くことができるようにするとともに、楽しんで表現しようとする態度を育てる。」とある。さらに、「入門期の指導としては、書くことを楽しみ、書くことに親しむことが第一の目標となる。」とし、「親しむとは経験するということでもあり、ここでいう経験とは、実際に書いたり、書いたものを読んだりすることを指す。」としている。つまり、楽しみながら書いたり読んだりすることが、まずは大事ということである。

入学したばかりの子供たちには、これまでの経験の違いから、「本に親しむこと」「読むこと」をはじめ、「書くこと」の力にかなりの個人差がある。

このような子供に対して、以下の章で述べる取組を通して、文字や言葉に親しみ、文や文章を「書くこと」へつなげていくことを試みた。

## 2 研究の内容

1年生1学期における「書くこと」の力を育てるための国語指導を、次の2つの手立てに分けた。

- (1) 文字や言葉に興味をもつ手立て
- (2) 文・文章を書く手立て

これらの手立てにおいて、いくつかの取組を行った。また、2つの手立ては段階を追って進むものではなく、重複しながら行うこととした。

## 3 実践

- (1) 文字や言葉に興味をもつ手立て

## ① 本に親しむための工夫

本に親しむことで、読解力が養われるだけでなく、豊かな言語感覚を身に付けることができる。そこで、「書くこと」の力を育てるためには本に親しむ経験が絶対に必要なことであると考えた。

しかし、子供たちがこれまで本に接してきた経験には、かなりの差がある。毎日寝る前にたっぷりと本を読んでもらっている子もいれば、家で本を開いたことがほとんどない子もいる。そこで、学校生活の中で本とかかわる時間をできるだけ増やすことを考えた。

学校で子供が本に接する時間として確保した時間は、週に3回の朝読書の時間（1回15分）と毎週1時間の図書の時間、そして給食前後の待ち時間や予定された学習内容が終わった後の“すき間の時間”である。

子供が朝学習やすき間の時間にすぐ本が読めるように、机の横に絵本袋を用意し、自分が読む本を常に入れておくようにした。始めのうちは「本じゃなくてお絵かきしてもいいですか。」と聞いてきた子供が何人かいたが、日が経つにつれて時間があると自分で本を出して読み始める子供もでてきた。

図書の時間には、学校司書が読み聞かせやおすすめの本の紹介など、子供が本に興味を示す活動を行った。毎回、2冊の本を読み聞かせることで、子供たちは読み聞かせを楽しみながら本に親しむことができた。読んでもらった本は大人気になり、借りて帰る子供もいた。また、子供の希望を聞き、おすすめの本を紹介することで、子供たちは安

---

\*新潟市立桜が丘小学校

心して読書に取り組むことができた。

## ② 音読活動・暗唱活動

文章には、「文型」がある。文章を書く時、ほとんど意識しないが「文型」に沿った文を書いている。「書くこと」の力を伸ばすためには基本的な「文型」を身に付ける必要がある。その「文型」を身に付けるためには、文章を覚えるまで何度も読むこと、つまり「音読」が有効であると考えた。

音読をする時、文章の構成をつかんだり、文章の内容を正しく理解したり、場面や情景をイメージ豊かに読んだりするためには、一字一句を大切に正しく読むことが大切である。しかし、1年生の段階ではまだまだ正しく自信を持って音読ができない子供もいる。そのために、音読の技術を高める必要がある。

ア 口を十分に開く（母音の発音の形）

イ 呼吸を正しく（句読点で切る）

ウ しっかり声を出す（おなかから響かせる）

エ 正しい姿勢で（姿勢を伸ばして足をつける）

オ 正しく読めるように（範読・連れ読み・交互読み・一人読み・一斉読み を繰り返し練習する）

カ 音読の継続（国語の時間の音読、宿題の音読カード）

アからカのことを意識させながら、正しく読めるようにするための練習を教材文ごとに10回読むことを目標に繰り返し行った。

子供たちは一つの教材文を何度も読んでいくと、文章を覚えてくる。この覚えた文が作文を書くときに役立った。文の法則性やルールをつかみ、言葉の数を増やすことができた。何度も読んだので、『はなのみち』は教科書を見ないで暗唱できるまでになった。「くまさんが ふくろを みつけました。」などの基本的な文型を獲得することができた。

暗唱は『声に出して読みたい日本語』（齋藤 孝、草思社、2001年）から「つけたしことば」と「じゅげむ」を選んだ。「つけたしことば」と「じゅげむ」を大きな紙に書き黒板の横に貼り付けると、子供たちは一斉に興味を示し、たどたどしく読み始めた。この文章は、子供にはなじみのない少々難しい言葉が使われているが、リズムの良い言葉のため読んでいておもしろい文章である。何度か繰り返すうちに、読めるようになった子供たちは調子の良い言葉のリズムに節をつけて歌うように唱えるまでになった。全員で読んでみると、読めない子供も読めるようになった子供に引っ張られながら、調子の良い言葉のリズムを感じることもできた。

全員が暗唱できるようになると、読み方にいろいろな工夫ができる。早口言葉のように速く読んだり、歩くようにゆっくり読んだり、繰り返しながらだんだんと速く読んでいったりと、読む速さを工夫することで、言葉遊びのように楽しく文章に触れることができた。

また、保護者や全校児童に見てもらおうという発表の場を設定した。子供たちはみんなに聞いてもらえることがとてもうれしいようで、後で「お母さんが来てくれたから後ろまで聞えるように大きい声で発表したよ。」などと教えてくれた。

暗唱をすることで、子供たちは言葉と楽しくかかわることができた。言葉のおもしろさやリズムのある文章に触れることで、文字に興味をもち、積極的にかかわろうとする姿が見られた（資料1）。

### 資料1 子供の感想（筆者の聞き取り）

つけたしことばを早口で言えたことが楽しかったです。それに、おなかから声を出したら気持ちよかったです。つけたしことばも前より上手になりました。（A子）

つけたしことばが上手にできました。最初はどきどきしたけど、声の大きさとつけたしことばの速さがすごかった。（B男）

みんな力いっぱい大きな声を出していました。お母さんの顔がカメラで見えなかったけど、緊張しました。つけたしことばは3番目が楽しかったです。（C子）

## (2) 文・文章を書く手立て

### ① 教室環境の工夫

子供にとって教室は、学校生活でのほとんどの時間を過ごす場であり、最も大切な学習の場である。教室環境を子

供たち自身が学習の様子を見て取れるようにすることで、学習に対する意欲が高まることはもちろん、今までの学習の振り返りやこれからの学習の見通しをもつことができると考えた。

教科書などの資料を見ると、一文字のひらがなだけを覚えさせるのではなく、言葉として覚えさせるようになっている。教科書で学習する順に「い・ち・ね・ん」などひらがなの言葉からはじまり、濁点のある言葉、促音のある言葉、半濁音のある言葉、長音のある言葉、拗音のある言葉を短冊で掲示した。ここで気を付けたことは、文字ではなく言葉で示したことである(写真1)。言葉で掲示することで、ひらがなとそれが表す対象物をイメージして覚えることができると考えた。

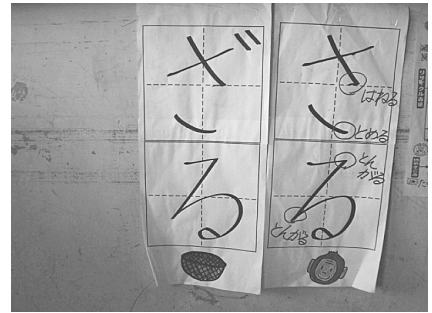


写真1

さらに『ことばをいれて、ぶんをつくらう』より主語と述語の文を、『は・を・へをつかって』より助詞を使った文を掲示した。これにより、実際に文を書くときの“言葉、句読点、助詞”の使い方を総合して覚えられ、使うことができるようになるのではないかと考えたためである。実際、作文を書くときにこの掲示を見ながら参考にしてしている子供もいた。

また、子供が書いた作文についても、担任の共感的なコメントを書き加え、透明のファイルに入れて全員の作文が見えるように掲示した(写真2)。“(2)文・文章を書く手立て”にも関係があるが、文章が書けない子供の中には「何を書いていいかわからない」という子供がかなりいる。そのような子供にとっては、友達の書いたものは一つのよいサンプルとなるのではないかと考えたためである。



写真2

新しい作文がファイルに入ると、子供たちは自分の作文だけでなく友達の作文にもよく興味を示していた。「たくさん書いてあるね。」「絵が上手だね。」などの好意的な感想がたくさん聞えてきた。しかし、内容についての感想はほとんどなかった。

## ② 作文シートの工夫 (絵と文で書く)

子供たちの中には、まだまだひらがなが上手に書けず思ったことがすらすらと文章にできない子や、何を書いたらいいのかわからず書きたい場面がイメージできない子が何人かいる。また、事実だけを羅列しその時の気持ちや心の中で思ったことをうまく表現できない子も数人いる。そのような子供にとっては、書こうとする対象をより身近に感じ、その場面をはっきりとイメージするために、まず“絵”で表すことが必要ではないかと考えた。

絵と文と一緒に書くということは絵日記である。当校には学年ごとに独自の作文シートがあり、幸いなことに1年生の作文シートは絵日記の形になっている。文章を書く際はこのシートを最大限活用することにした。

実際に書いてみると、「書くこと」の力には個人差が大きいことがわかる。すぐに文章から書き始める子、絵を描いてイメージを膨らませてから文章を書き始める子、文と絵をいったりきたりしながら書く子、絵だけしか描けない子、そしてひらがなが書けない子。いろいろなタイプがあるが、絵だけしか描けない子供とひらがなが書けない子供については特別な対応が必要になった。

絵だけしか描けない子供に対しては、その絵について一緒に話をした。これは何をしているところなのか、誰と一緒に遊んでいるのか、どんな気持ちなのか、何が楽しいのか、と聞いていくうちに、子供の中でその時のことを思い出し、具体的にイメージしながら書くことができた。

ひらがなが書けない子供に対しては、その子供の言葉をそのまま作文シートに薄く書いてやった。ひらがなを書くことはできないが、自分の言いたいこと、書きたいことがしっかりある子供である。子供は薄く書いてある字をなぞることで、自分の作文を完成させることができた。

## ③ 主体的な活動を大切にする

1年生の子供にとって、自分が主体的に活動するということは、自分の思いや願いの実現に向けて精一杯活動している、ということである。ということは、主体的に活動している時の方が受身で活動している時よりも言いたいこと、書きたいことがたくさんあるはずである。その場面を捉え、「書くこと」の活動を意図的に設けることで、「書くこ

と」に慣れ、「書くこと」の力が付くのではないかと考えた。

1学期は、活動や行事の後にできるだけ作文を書く時間を設けた。その中で、音楽鑑賞会後の作文と、音楽発表会後の作文を比較する(表1)。

受身的な活動である音楽鑑賞会後の作文では、一文で「あらじんのおじさんがおもしろかったです。」「いろいろなつきがあっておもしろかったです。」というものが多かった。子供の実態として、演奏される曲や楽器についての知識がなく、音楽を聴くという経験も少ない、ということがいえる。そのことを考えると、音楽鑑賞という活動に自分の思いや願いを入れることはできないのである。

反対に音楽発表会では、今までの練習のことや、本番の緊張感、見に来てくれた保護者のことなど、すべて自分の言葉で語るができる。

この違いが、活動後の作文の平均文字数に表れたと考える。

表1 受身的な活動と主体的な活動における平均文字数の比較(児童数30名)

活動名	活動内容	活動後の作文の平均文字数
音楽鑑賞会	ゲストの演奏を聴く(受身的な活動)	28.4文字
音楽発表会	全校児童・保護者の前で音楽発表する(主体的な活動)	60.4文字

#### ④ 相手を意識して文章を書く 実践事例 単元名『てがみを かこう』(7月)

「書くこと」には、(ア)人に伝えていくよさ(伝達)、(イ)振り返られるよさ(記録)、(ウ)考えることを促すよさ(思考)の3つのよさがある。この単元では、特に(ア)人に伝えていくよさ(小学校に入学してからできるようになったことを、おうちの人に伝える手紙を書く。)と、(イ)振り返られるよさ(自分の作文を見直し、どんな出来事があったのか思い出す。)の2つのよさにふれる。そのことにより、「書くこと」についての必要感を持たせたいと考えた。

単元目標

○特定の相手に向けて手紙を書くことを通して、「書くこと」の楽しさを知る。

単元計画(全5時間)

次	時	主な活動内容
1	1	○今までにももらったことのある手紙を思い出し、手紙を書くことへの意欲を高める。 ○P72の教材文(ながせさんの手紙)や実際の手紙を読み、手紙を書くときの約束を見つけ、発表し合う。
	2	○学級の友達に、一文の簡単な手紙を書く。
2	3	○前時の手紙を交換し、感想を伝え合う。そして「もっと手紙を書きたい。」「いろいろなことを伝えたい。」という気持ちを喚起させる。 ○手紙を書く相手を決める。(おうちの人に、1学期にできるようになったことを伝える。 ○一番伝えたいことを一文ではっきりと書く。
	4	○伝えたいことを具体的に詳しく書く。
3	5	○受け取る相手のことを考えて、丁寧に清書する。

この単元で一番大切にすることは、『伝えたい』という気持ちを持たせることである。そのためには、『相手=誰に書くのか』『目的=何を書くのか』をはっきりさせる必要があった。そこで、『相手=おうちの人』『目的=1学期にできるようになったこと』と明確に提示することにした。「君たちが学校で何をがんばっているのか、おうちの人には知らないよね。だから、君たちががんばってできるようになったことを、おうちの人に教えてあげよう。きっと喜ぶぞ。」と期待感を持たせた。

4月からの4か月の間に、子供たちはいろいろな事に挑戦してきた。今までどんなことをがんばってきたのか、これまでに書きためた作文を参考にしながら出し合い、黒板をうめていった。国語や算数の勉強、体育でのプール、運動会等の行事、育てたあさがおについて、友達との遊びのことまで、内容は多岐にわたった。それを参考にしながら、自分にとって一番思い出に残るものを選び、手紙に書いた。

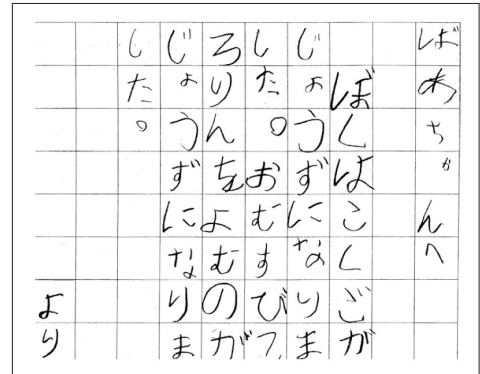
伝える相手をはっきりと決まったので、子供たちはその相手をイメージしながら手紙を書いていた。相手の顔を思い浮かべ、語りかけるように書くことで、何を書いていいのか分からない、という子供はいなかった。

また、伝えたい相手を明確に意識することで、いつもよりしっかりと文章の見直しをした。ひらがなの間違いや助

詞「は・を・へ」の間違いに気付いたり、より丁寧に書き直したりという様子が見られた。

T児は大好きなおばあちゃんに手紙を書いた。内容は、いつも宿題の音読を聞いてもらっているおばあちゃんに、音読が得意になったことを知らせる手紙である。T児はこれまでの作文活動ではいつも1文しか書けず、自分の思っていることを文にすることがとても苦手な子供である。1学期に書いた作文の平均文字数は29.6文字だが、今回の手紙では43文字書いた。さらに、苦手な助詞や拗音、句読点にも気を付けて、しっかりとした文字で書くことができた(資料2)。

資料2 T児の手紙

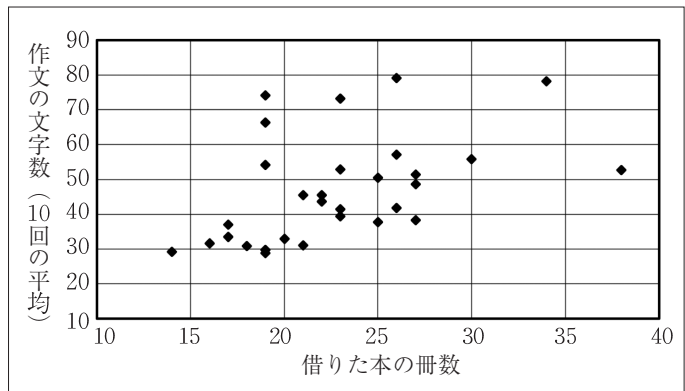


4 考察

(1) 「文字や言葉に興味をもつ手立て」についての考察

子供たちが1学期、学校の図書館から借りた本の冊数と、1学期に書いた作文10回分の文字数の平均をグラフに表した(表2)。これによると、本に親しんでいる子供ほど、作文をたくさん書いていることが分かる。つまり、文・文章を書く力が育っていると見える。「書くこと」の力を育てるためには、本に親しませることが有効な手立てであることが分かる。

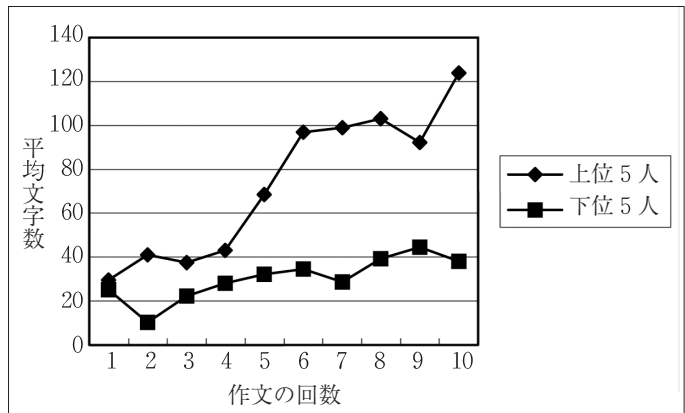
表2 借りた本の冊数と作文の文字数の関係



(2) 「文・文章を書く手立て」についての考察

右のグラフ(表3)は、10回書いた作文の平均文字数の多い方(上位)5人と、少ない方(下位)5人の平均を、回数を追って表したものである。

表3 上位5人と下位5人の文字数の変化



1回目の作文では、文字数にほとんど差はない。しかし、10回通してみると、下位5人の平均は30~40文字と微かな伸びを示しているのに対し、上位5人の平均は5回目6目に急に文字数が増え、その後もその文字数を増やす勢いである。

5回目、6回目に書いた作文のテーマはそれぞれ「盲学校との交流会」「桜が丘公園で遊んだこと」で、どちらの活動も子供たちが主体的に参加した活動である。それぞれの子供の作文を例に挙げる。(1文目は共通のため省略。筆者の方で漢字に変換した。)

上位の子供の例	下位の子供の例
木登りが生まれて初めてできました。ジュウニホシテントウムシがいました。捕まえようとしたけど飛んで逃げてしまいました。でも珍しいテントウムシを見れて本当にうれしかったです。	鬼ごっこが楽しかった。 ジャングルジムが楽しかったです。
ビービー弾をいっぱい拾ってきました。でもわたしが拾ったビービー弾をみんなが欲しいって言って、あげちゃいました。そしてなくなっていい個になってしまいました。	砂遊びとジャングルジムで遊んだ。

作文を比較してみると、下位の子供は出来事それだけを書いているのに対し、上位の子供の作文は出来事を、その時の様子やその後のこと、自分の気持ちを入れて詳しく書いている。「ジャングルジムが楽しかったです。」と書いた

下位の子供にその時の様子を詳しく聞くと、いろいろなことを話してくれる。つまり、言いたいこと、書きたいことはあるが、どのように書いたらいいのかわからない状態である。「何を書いていいかわからない」という子供の参考になるように、透明のファイルに入れて全員の作文が見えるように掲示したが、十分な成果は得られなかったということになる。

全体的に見て、作文の回数を重ねるごとに文字数も増えてきている(表4)。「書くこと」の力がついてきたということを示している。文字数を増やすためには、その場面をより鮮明にイメージすることが大切である。そのための手立てとして、次の3つが有効であったと考える。

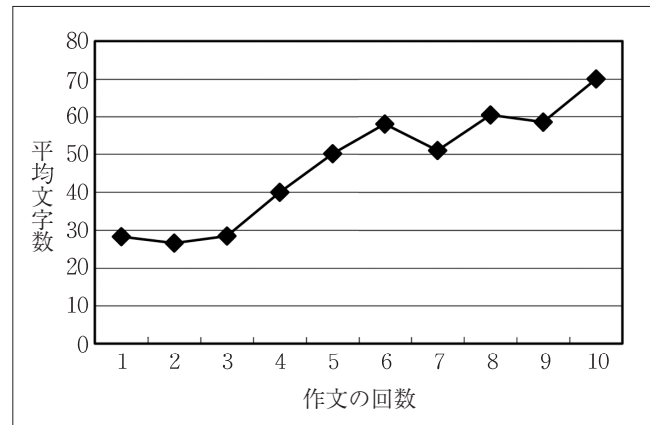
絵日記形式の作文シートを使い絵と文と一緒に書くことで、その場面のイメージを広げることができた。

主体的な活動を大切にすることで、伝えたいことや書きたいことを蓄積でき、活動に対する思いを深めることができた。

『相手』と『目的』をはっきりさせ『伝えたい』という気持ちを持たせることで、伝える相手の顔をイメージし、自分の言葉で語ることができた。

これらの手立てが作文の文字数を増やし、「書くこと」の力を高めていったと考える。

表4 平均文字数の変化



## 5 今後の課題

これまでこのようにして、「書くこと」の力を伸ばしてきたが、今後の取組としては次の点を挙げる。

### (1) 本に親しませる工夫

「書くこと」の力を付けるためには本に親しむことが有効な手立てであることが分かったが、未だ個人差がある。そのため「朝の5分間読み聞かせ」を行い、どの子にも本に親しむ経験を積ませる。

### (2) イメージを膨らませる工夫

下位の子供の「書くこと」の力をつけるために、より明確なイメージを持たせることが大切である。そのため、デジタルカメラの画像を用いてその場面をより鮮明に思い起こす工夫や、イメージマップを用いて上位の子供のイメージを共有できるようにする工夫を行う。

### (3) 良い作品を紹介する工夫

「何を書いていいかわからない」という子供に対して、作文をみんなが見えるところに掲示するだけでは限界があることが分かった。今後は、作文発表の時間を少しずつとり、どんなことを書けばよいか、どういうふうに行けばよいかを学び合う取組が必要である。

## 6 参考文献

- 安野光雅, 大岡 信, 谷川俊太郎, 松井 直 「にほんご」 福音館書店, 1979年  
 光村図書出版株式会社 「小学校国語 学習指導書 一ねん(上) かざぐるま」 2005年  
 齋藤 孝 「声に出して読みたい日本語」 草思社, 2001年  
 文部省, 「小学校学習指導要領解説 国語編」 1999年